論　文　ニダバ (*Nidaba*) 33(2004), 31-40

日独イディオム比較・対照

― 「指」と"Finger"を構成要素とする イディオム表現 ―

植　田　康　成

"Sag mal, Ede, warum haben sie dich denn schon wieder eingelocht?"
"Ich habe zu kurze Beine."
"Aber deshalb landet man doch nicht im Gefängnis!"
"Doch, **wenn man auch noch zu lange Finger hat!**" (Lenz 2000: 84)
(「エーデ、どうしてまたぞろほおりこまれたんだ？」
「足が短すぎるんだ。」
「そんなことで刑務所いきにはならんよ！」
「いやいや、**おまけに指が長いんだから**、どうしてもそうなるよ！」)

0 はじめに

人差し指は、その名前が示しているように、コミュニケーションにおいて言及対象を指示する機能を持ち得る。そして「指による指示行為」は、「まなざし」とともに幼児の言語習得過程、とりわけ意味の獲得において重要な役割を担っている。また、人間の全身が触覚器官でもあるといえるが、触って確認する行為の多くは手あるいは指によっている。点字は指で「読む」。指が触覚にすぐれているからであろう。「白魚のような指」というのは、若い女性の細くて白い指を形容する表現であるが、日本人はとりわけほっそりした長い指に色気を感じているようである。

本論文では、日本語における「指」を構成要素とするイディオム表現と、ドイツ語における"Finger"を構成要素とするイディオム表現の比較・対照を試みる。ドイツ語イディオム学習・教授法、そしてドイツ語を支えるドイツ語圏の文化等について、何らかの示唆を引き出すことが目標である。

1 資料源について

1.1 日本語の資料

日本語における「指」を構成要素とするイディオム表現は『成語林』(尾上(編) 1992)から収集した。その数は【資料 1】としてリスト・アップした 15 である[1)]。『成語林』による意味の説明も書きうつしてある。日本語のイディオム表現についても学習しなければならないという考えからである。厳密にいうならば、15 の表現の中には、ことわざも含まれている。しかし、比較・対照するドイツ語のイディオム表現を収集したイディオム辞

典がことわざ的な表現も収録しているということ、日本語においてはことわざ表現を短縮してイディオム的に用いる場合も多いということ、そして資料源を特定して比較・対照する方が数値的に信頼できる、という3つの理由から、あえてことわざ表現とイディオム表現を分離することなく、収集した表現すべてを資料とすることにした[2)]。

1.2 ドイツ語の資料

ドイツ語における"Finger"を構成要素とするイディオム表現は、『ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 1992: 205-208) から収集した。その数は【資料2】としてリスト・アップした 42 である。筆者による日本語訳を付してある。1.1.節で述べたように、42 の表現にはことわざ的な表現も含まれている。

日本語における「指」の名前は、親指、人差し指、中指、薬指、小指という具合に、「指」の前にさらに語が付加されて、個々の指の名前が造られている。従って、「指」を構成要素とする複合語であると理解すればいい。しかし、ドイツ語については、そうはいかない。親指については、"Daumen"、足の指については"Zeh"あるいは"Zehe"という単一語が存在している。他の指については、日本語と同じように"Zeigefinger"、"Mittelfinger"、"Ringfinger"、"kleine Finger"という複合表現となっている。しかも、ドイツ語については個々の指に関してイディオム表現がある。"Daumen"については 9、"Zehe"を構成要素とするイディオム表現は 3 ある。"Daumen"との複合語"Daumenschrauben"、"Finger"との複合語である"Fingernagel"、"Fingerspitze"の 2 つを構成要素とするイディオム表現をも資料に含めるのが妥当であろう。『ドイツ語イディオム辞典』にはないが、"mit dem erhobenen Zeigefinger"という言い回しが、レーリヒ『ことわざ的言い回しの大辞典』(Röhrich 1991/92) にはカリカチュアとともに載っている (注 5) を参照)。結果的には 16 の表現を資料として付け加えることになり、イディオム表現の総数は、58 となる[3)]。

2 資料の分析

2.1 日本語

2.1.1 形態・統語論的分析

日本語における「指」を構成要素とするイディオム表現 15 を、形態・統語論の観点からみると、どうなっているのであろうか。

助詞「を」を伴っているものが多い。「指(を)一本(も)」「指(を)折り」も本来的には助詞「を」が省略されている表現であろう。「指呼の間」も、「指をさして呼んでも応答できる間」というわけで、やはり「を」が含まれていると考えられる。「五本の指」は「五本の指で切るにも切られぬ」と同じであり、「で」が省かれている。「指汚い」は「が」が省かれている。いずれも古めかしい表現である。現代語ではいずれも「は」で置き換えることができる。そう考えると、15 のうち「を」を伴うのが 12、「は」を伴うものが 3 ということになる。「指」の前に連体修飾語が置かれているものは、「五本の指」「五本の指で切るにも切られぬ」「指呼の間」の 3 つである。

2.1.2　意味論的分析

意味論的な観点からは、どのようなことがいえるだろうか。理論的には、身体部位としての「指」を意味する場合、「指」が換喩的に「人間」を意味する場合、「指」が関与する触覚能力そのものを意味する場合、触覚能力から拡大された判断能力、精神、人格等を意味する場合の 4 つを区別することができる。しかし、収集した 15 の表現に関していうならば、3 分の 2 に当たる 10 の表現において、「指」は身体部位としての「指」そのものを意味している（a）。転義（換喩）的に、「指」が「人間」を意味している表現が 4 つある（b）。「指を惜しみて手を失う」は、身体部位としての「指」というよりも、転義的に「小さな物事」という意味で使われている（c）。指は微妙な点まで区別し得る触覚器官であるにもかかわらず、触覚能力に関わる意味で「指」が使われているイディオム表現は 1 つもない。従って、触覚能力から拡大されて「判断能力、精神、人格等」を意味することもない。

2.1.3　語用論的分析

語用論的には、どうであろうか。「指を詰める」という表現は、客観的な表現であるともいえるが、行為そのものはネガティブなものであり、喜んでするようなことではない。「指呼の間」は客観的な距離を意味しており、それ自体は中立的であるといえる。「指一本差させない」という毅然とした態度は、ポジティブなものといえよう。といったような観点から、15 の表現を、ポジティブな評価を伴うもの、ネガティブな評価を伴うもの、いずれでもないもの（±）という 3 つの部類に分けると、それぞれ 3、6、6 という数になる。中立的なものはネガティブにも使用可能である。したがって、ほとんど（12/15=0.8 つまり 80%）は、ネガティブな評価を伴って使われる表現ということになる。

2.2　ドイツ語

2.2.1　形態・統語論的分析

『ドイツ語イディオム辞典』の記述の原則は、まず構成要素としての名詞"Finger"が単独で出現しているもの（1-38）、他の名詞とともに出現しているもの（39-41）という具合になっている。"Finger"が単独で出現しているものについては、まず"Finger"が主語となっているもの（1 および 3）、述語名詞となるもの（2）、そして目的語となっているものという順に配列されている（4-17）。（18）以下は、前置詞の目的語となっているものである。前置詞はアルファベット順に配列されているが、"an"、"auf"、"durch"、"in"、"mit"、"um"、"unter"である。すべての場合において、"Finger"が付加的形容詞を伴っているかいないかは、問題としていない。また、名詞"Finger"が単数か複数かも問題とはしていない。ちなみに、単数で出現しているものは 15 あり、残り 26 は複数形である。"Ohr"に関しては、単数形は転義的な用法になっており、複数形は「耳」そのものあるいは「聴覚能力」を意味しているという差が見られた（植田 2003b：55 参照）が、"Finger"については、そういった差は見られない。指は本来は複数（10 本）ある。そして 10 本そろえば両手を意味す

ることになるのは当然であろう。"jmdm., etwas in die Finger bekommen"という表現にある"Finger"は"Hände"に置き換えることができる。具体的には片手、両手、どちらがイメージされているのかは判然としない。

2.2.2 意味論的分析

意味論的には、どのようなことが観察できるだろうか。日本語においてみられた（a）-（c）の3つの観点は、ドイツ語にも当てはまる。さらに、「指」が「第六感、権力、統率力等」を意味する表現がドイツ語にはある（d)。日本語に関して設定した3つの観点にこの新しい観点を付け加えて、分類した結果は、次のようである：(a)：指（Finger）そのもの：32、(b)：転義（換喩）的に人間（Mensch)：1、(c)：転義的に些細なもの：2、(d)：転義的に、第六感、権力（Gewalt)、統御（Kontrolle）等：6。

2.2.3 語用論的分析

日本語の場合と同様、イディオム表現が、ポジティブな意味、価値判断を伴って使用されるか（＋)、ネガティブな意味・価値判断を伴って使用されるか（－)、あるいはニュートラルな表現として使用されるのか（±)、という点から分類する。その結果は、次の通りである：(＋)：ポジティブな評価を伴うもの：6、(－)：ネガティブな評価を伴うもの：25、(±)：両方の価値評価を伴うもの：10。

3 分析に基づく比較・対照考察

3.1 形態・統語論のレベルにおける比較・対照

日本語の「指」を構成要素とするイディオム表現のうち12が「を」を伴って出現する。そして、ドイツ語の"Finger"を構成要素とするイディオム表現においても、"Finger"が単独で出現しているものについては、15が動詞の目的語となっている。主語となっているものは2つである。1つは換喩的表現で「人間」を意味し、述語名詞として使われる。つまり「指を」に対応する表現が多い。日本語においては「指」の前に形容詞がおかれる場合はない。ドイツ語において"Finger"の前に置かれる形容詞としては"klein"、"schlimm"、"lang"、"krumm"、"klebrig"がある。"klein"を除いて、そのほかはすべて否定的な意味を内包している。"schmutzig"は、副詞的に使われているが、これもネガティブな意味内容の語である。

3.2 意味論のレベルにおける比較・対照

日独両言語において、「指」と"Finger"が身体部位としての「指」を意味している場合がほとんどであるといえるが、ドイツ語の方がもっと多い。換喩的に「人間」を意味しているケースは、日本語の方が多い。5本の指を身内と捉え、指1つ欠けても非常に不自由するということから、身内が結束し、まとまっていることの重要性を説くという、日本人の考え方がその背景にはあるといえる。ドイツ語には1つしかない。しかもその意味は一般的に「人間」ということであり、特に身内、仲間といったことではない。ドイツ語には転義的に第六感、権力、統御といった意味で使われる場合が6（14.6%）あるが、日本語には1つもないというのが、目を引く。

3.3 語用論のレベルにおける比較・対照

語用論のレベルでは、ドイツ語においてポジティブ及び中立的な表現の割合が日本語よりも少ないということが指摘できる。しかし、中立的な表現を含めて、ネガティブな意味合いで使われる表現は、両言語において8割を超えている。

3.4 ドイツ語学習・教授法の観点からの比較・対照

「指」は「手」の一部である。そして「手」は「腕」の一部である。さらにいうと「指」「手」「腕」いずれも「身体」(人間)の一部である。原理的には換喩的に、より大きな部分を意味し得ると考えられる。実際には「指」が「人間」を換喩的に意味している。しかし、ドイツ語と日本語を見比べてみると、ドイツ語では"Finger"とあっても、日本語では「指」ではなく「手」あるいは「腕」となる場合がいくつかある。たとえば"jmdm./jmdn. jucken die Finger nach etwas" (あることがしたくて指がかゆい)は、日本語では「腕が鳴る」「うずうずしている」あるいは「腕をさする」ということになろうか。"sich nicht [gern] die Finger schmutzig machen" (指を汚すのを好まない)や"die Finger von jmdm., von etwas lassen" (あることから指を離す)などでは、「手を汚す」「手を引く」というように、日本語では「手」が対応している。"eine[n]/zehn an jedem Finger haben" (各々の指にもっている)は、結果的に「両手に花」といったことになり、この場合も「指」は「手」に対応している。"jmdn. um den [kleinen] Finger wickeln können"では「(小)指」となっているが、日本語では「小手先で軽くあしらう」がほぼ対応し、「小手先」ということになろう。「手先」すなわち「指」ということになる。

"jmdm. in die Finger fallen/geraten" (誰かの指の中に落ちる)、 "jmdm. unter/zwischen die Finger kommen/geraten" (誰かの指の間に入ってしまう)の場合も、「指」から「手」、「人間」(権力)という具合に換喩関係にあるという理解をするならば、そして「手下」という語に思いいたるならば、誤解する可能性は少ないであろう。"keinen Finger krumm machen" (指を曲げない)や"keinen Finger rühren" (指を動かさない)の場合は、日本語にも「指一つ動かさない」というほぼ同様の表現があるので、容易に理解できるであろう。ただし"krumme Finger machen"となると、「泥棒する」ということになるので、否定辞"kein"があるかないか、"krumm"が付加語となっているかどうかに注意する必要がある[4)]。

ドイツ語で表現するという観点からは、どうなるであろうか。日本語の「指折り」「指を折る」は行為を表現しているが、ドイツ語ではその行為の目的を表現することになる。すなわち"an den Fingern zählen"である。しかし、イディオム表現である"sich etwas an den [zehn/fünf] Fingern abzählen/abklavieren können"は、子供が指で数えるというイメージに基づいているため、「容易に考えられる」という意味になり、子供でもできることができないのか、といったような非難を込めて使われる場合が多いようである。その意味では日本語とは少し意味が異なり、偽の友達といえないこともない。

日本語では「指を銜える」という場合、どの指をくわえるのか。親指をしゃぶるという

イメージが強いが、ドイツ語では「指を銜える」のではなく、"sich die Finger/alle zehn Finger nach etwas lecken"（10本の指をなめる）というのである。この言い回しは、「のどから手がでるほどほしい」という日本語の表現にも対応させることができる。「指を染める」は「手を染める」ともいう。また「手をつける」とも類義である。ドイツ語では"mit etwas anfangen"という何の変哲もない表現しか思いつかない。『成語林』には収録されていないが、「後ろ指を指す」（かげで他人を非難する。かげ口を言う）という表現が日本語にはある。ドイツ語では"hinter jmds. Rücken schlecht sagen"ということになるが、これはイディオム表現ではない。

4 おわりに

日本語における「指」を構成要素とするイディオム表現とドイツ語における"Finger"を構成要素とするイディオム表現について、数だけを比較すると、ドイツ語の方が日本語の約3倍近い。この数の違いは、ドイツ語の表現のいくつかは日本語では「手」を含む表現が対応しているという事実に起因している。すなわち、ドイツ語の表現を理解する場合は、"Finger"とあっても、換喩関係を念頭において、日本語では「手」におきかえて理解しなければならない場合があるということである。

最後に"Finger"に関するイディオム表現を含んでいるウィットを掲げて、本論文を終えることにしよう。

> Der junge Don Juan hat Caroline zu einer Segelpartie überredet. **Die Mutter hebt warnend den Zeigefinger** [5]. Aber Caroline wehrt ab: "Ich werde auf der Hut sein!" Abends kommt sie niedergeschlagen nach Hause und berichtet: "Ich war so standhaft, ich habe alle seine Anträge abgewehrt. Aber dann hat er mir eine große schwarze Wolke gezeigt und gesagt, dass bald ein schlimmer Sturm aufkommen würde. Da ließ ich mich am Mast festbinden, damit ich nicht über Bord gespült werde..." （Helltau（Hrsg.） 2002: 64）（若い女たらしが、カロリーネをセーリングに誘いだした。**お母さんはきつく警告したが**、カロリーネは「用心するから、大丈夫！」と聞く耳を持たない。夕方カロリーネは打ちひしがれて家に帰ってきた。「あたしは耐えきったのよ。彼の申し出をすべて断ったわよ。だけど、彼は、大きな黒い雲を指さして、すぐにも大嵐がやってくるぞ、といったの。そこであたしは、波にさらわれないようにと、マストに縛り付けてもらったのだけど...」）

5 注釈

1）立川昭二『からだことば』の「作家とからだことば」と題する章には「「指」と川端康成」（283-285 頁）という節がある。指に込められたエロティシズムに川端文学の真骨頂があるという指摘は興味深い。指は微妙かつ繊細な触覚器官なのである。

2）イディオム表現の言語的特徴は、「固定性」（Stabilität）、「イディオム性」（Idiomatizität）、「語彙性」（Lexikalisiertheit）、「再生産性」（Reproduzierbarkeit）、「イメージ性」（Bildhaftigkeit）の5つに集約できる。詳細については植田 2003a、第2章、10-17 頁を見られたい。

3）統計数値は、"Finger"を構成要素とするイディオム表現 42 をもとにして算出したものである。【資料 2】の 43.以下の表現は、参考資料としてあげた。

4）日本語でも「指が曲がっている」という。そして実際に指を曲げる仕草をして、「泥棒」を意味する。他方、「手」を構成要素とする「手癖が悪い」という表現もある。

5）次のカリカチュア(Röhrich 1991/92: 1763） は、この言い回しをモチーフとして描かれている。同じイスラム圏でありながら、宗派を異にしているという宗教上の対立から、戦争状態にあるイラクとイランに対して、アメリカとソ連の主導で国連決議を行って警告を発しているという図である。イラン、そしてイラクをめぐるソ連、アメリカの外交は、それ以前のイギリス、フランスをも含めて、根本的には植民地主義的なものであったということは否定し得ない。2003 年のイラク戦争も、大量破壊兵器の廃絶という大義名分のもと、アメリカ主導で行われたが、最終的にはイラクの石油資源をめぐる争奪戦であったということになるのではないか。アメリカをはじめとする西側核保有国とロシア（さらには中国）は、イラクに武器を輸出していたのであれば、イラクの軍備状況については詳細な情報を握っているのであり、大量破壊兵器が存在するかしないかについては明言できたはずである。現在（2004 年 1 月）に至るまで大量破壊兵器が発見できないというのは、そもそもは存在しなかったのではないかという疑念を確信に変えていきつつあるといえよう。

6 参考文献

DUDEN 1992: DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Bearbeitet von Günther Drosdowski und Werner Scholze-Stubenrecht. Mannheim/Leipzig /Wien/Zürich: Dudenverlag.

Helltau （Hrsg.） 2002: Alexander Helltau （Hrsg.）, 1000 neue Herrenwitze. München: F.A.Herbig Verlagsbuchhandlung.

Lenz 2000: Nikolaus Lenz, Das große Witzebuch. Ravensburg: Ravensburger Buchverlag. （Ravensburger Taschenbuch Band 4171）

尾上（編）1992：尾上兼英編『成語林』、旺文社。

立川 2002 年：立川昭二『からだことば』、早川文庫。

植田 2003a：植田康成『ドイツ語イディオム学習・教授法に関する総合的研究－日独イディオム比較・対照研究の視点から－』、現代図書。

植田 2003b：植田康成「日独イディオム比較・対照－「耳」と"Ohr"を構成要素とするイディオム表現－」『広島大学大学院文学研究科論集』第 63 巻、51-69 頁。

7【資料】

【資料１】日本語における「指」を構成要素とするイディオム表現

1．指一本（も）差させない：他人に少しの非難も干渉もさせない。(a)（＋）
2．指折り：多くのものの中で、指を折って数えられるほど少数で、優れていること。(a)（＋）
3．指汚いとて切られもせず：身内に悪人がいるからといって、おいそれと追い出したり見捨てたりするわけにはいかないことのたとえ。(b)（±）
4．指を惜しみて掌を失う：小さなことにこだわって大きな利益を失うたとえ。(c)（－）
5．指を折る：指を折り曲げて数を数える。指を曲げて数え上げる中にはいるほど目立つ存在である。(a)（＋）
6．指を銜える：他人が得することをしているのを、うらやましく思いながら、何もしないでただ見ていることのたとえ。(a)（－）
7．指を染める：最初に手をつける。(a)（±）
8．指を詰める：やくざや暴力団などで、失敗の責任をとったり、わびたりするために指を切

り落とす。(a)（－）
9．指を以て河を測る：物事を測るのにはかり方の不適当なたとえ。何か事を行うのに方法を誤るたとえ。(a)（－）
１０．指を以て沸けるを撓す：なんの効果も上がらず、損害ばかり受けるたとえ。(a)（－）
１１．五本の指：（五本の指のうち、どの一本でも切ってよいという指はないという意から）切っても切れない縁。親子兄弟など骨肉の縁の深いもの。(b)（±）
１２．五本の指で切るにも切られぬ：肉親の中に悪者がいても容易に縁は切りにくい。骨肉の縁は絶ちがたいということのたとえ。(b)（±）
１３．月を指せば指を認む：（仏教で［月］を仏法に［指］を教理にたとえて道理を教えても、）文字や言葉のはしばしにこだわって、本質を理解しようとしないたとえ。(a)（－）
１４．臂の指を使うが如し：意のままに人を使うたとえ。(b)（±）
１５．指呼の間：非常に近い距離、あるいは、近くに感じられること。(a)（±）

【資料２】ドイツ語における"Finger"を構成要素とするイディオム表現

1. das sagt mir mein kleiner Finger （ugs.: scherzh.）: ich habe eine untrügliche Ahnung（d）（＋）
（そのことを私の小指が告げる：私の予感は間違いない）
2. ein schlimmer Finger sein （ugs.）: ein böser, gefährlicher Mensch sein（b）（－）
（悪い指だ：邪悪で危険な人間だ）
3. jmdm./jmdn. jucken die Finger nach etwas （ugs.）: jmd. möchte etwas （mit seinen Händen） sehr gern tun（a）（＋）（何かを求めて指がかゆい：何かをしたがっている）
4. sich die Finger abarbeiten （ugs.）: überaus schwer, bis zur Erschöpfung arbeiten（a）（－）
（指を使い果たす：働いて、疲労困憊になる）
5. sich die Finger abschreiben/wund schreiben（ugs.）: sehr viel, bis zum Überdruss schreiben（a）（－）
（指を傷つけるほど書く：いやになるまで書く）
6. keinen Finger krumm machen （ugs.）: nichts tun（a）（－）（指を曲げない：なにもしない）
7. keinen Finger rühren （ugs.）: sich nicht für jmdn. einsetzen, untätig bleiben（a）（－）
（指を動かさない：なにもしない）
8. lange/krumme Finger machen （ugs.）: stehlen（a）（－）（指を長くする／曲げる：盗む）
9. klebrige Finger haben （ugs.）: ein Dieb sein, stehlen（a）（－）
（粘っこい指をもっている：泥棒である、盗む）
10. wenn man jmdm. den kleinen Finger gibt, nimmt er gleich die ganze Hand: wenn man jmdm. entgegenkommt, wird er gleich unverschämt in seinen Forderungen（c）（－）
（小指を与えると、手全部をとられる：好意的に対応すると、どんどんつけあがってくる）
11. den Finger auf die [brennende] Wunde legen: auf ein Übel deutlich hinweisen（a）（±）
（焼けるような痛さの傷の上に指を置く：災いをはっきりと示す）
12. den/seinen Finger darauf haben （ugs.）: die Kontrolle haben（d）（＋）
（指をおいている：コントロールしている）
13. die Finger in etwas/im Spiel haben （ugs.）: hinter etwas stecken（a）（－）
（何かに指を入れてもっている：何かの背後にいる）
14. die Finger von jmdm., von etwas lassen（ugs.）: sich nicht mit jmdm., mit etwas abgeben（a）（＋）
（あることから指を離す：あることとは関わらない）
15. sich nicht [gern] die Finger schmutzig machen（ugs.）: sich nichts zuschulden kommen lassen, sich an keiner ungesetzlichen Handlung beteiligen（a）（＋）
（指を汚すのを好まない：負債を追わない、不法な行為に関与しない）
16. sich die Finger verbrennen （ugs.）: Schaden erleiden; eine Schlappe einstecken（a）（－）
（指をやけどする：損害を被る、失敗する）
17. sich die Finger/alle zehn Finger nach etwas lecken （ugs.）: Lust auf etwas haben, etwas gern

haben wollen（a）（－）（何かをほしがって 10 本の指をなめる：何かをほしがる）

18. sich etwas an den [zehn/fünf] Fingern abzählen/abklavieren können （ugs.）: sich etwas leicht denken können, etwas leicht voraussehen können（a）（±）
（10 本の指で数えることができる：容易に考えられる、予見しやすい）

19. eine[n]/zehn an jedem Finger haben （ugs.）: sehr viele Verehrer, Freundinnen haben（a）（±）
（おのおのの指にもっている：たくさんの女友達をもっている）

20. eins/etwas auf die Finger bekommen （ugs.）: mit Schlägen bestraft, zurechtgewiesen werden（a）（－）（指に一つもらう：罰として打たれる）

21. jmdm. auf die Finger klopfen （ugs.）: jmdn. [warnend] zurechtweisen（a）（±）
（誰かの指を打つ：誰かに警告する）

22. jmdm. auf die Finger sehen/schauen: gucken（ugs.）: jmdn. genau beaufsichtigen, kontrollieren（a）（±）（誰かの指を見る：誰かを監視する）

23. sich etwas aus den Fingern saugen （ugs.）: etwas frei erfinden, sich etwas ausdenken（a）（－）
（指から吸い出す：何かを思いつく、考え出す）

24. jmdn, etwas nicht aus den Fingern lassen （ugs.）: jmdn., etwas nicht hergeben（a）（－）
（指から離さない：与えない）

25. [jmdm.] durch die Finger sehen: [jmds.] unkorrektes Verhalten absichtlich übersehen（a）（－）
（指を通してみる：正しくない行動を意図的に見逃す）

26. jmdm. durch die Finger schlüpfen （ugs.）: jmdm. entgehen（a）（±）
（指からすり抜ける：誰かから逃れる）

27. etwas im kleinen Finger haben （ugs.）: über etwas gründlich Bescheid wissen（d）（＋）
（何かを小指にもっている：何かに関して徹底的に知っている）

28. sich in den Finger schneiden （ugs.）: sich gründlich täuschen（a）（－）
（指に切り込む：根本的に思い違いをしている）

29. jmdn., etwas in die Finger bekommen/kriegen （ugs.）: jmdn., etwas finden, zu fassen bekommen（a）（±）（何かを指に得る：何かを見つける）

30. jmdm. in die Finger fallen/geraten（ugs.）: in jmds. Gewalt geraten, jmds. Opfer werden（d）（－）
（誰かの指の中に落ちる：誰かの支配下に入る、犠牲になる）

31. es juckt/kribbelt jmdm./jmdn. in den Fingern（ugs.）: 1. jmd. möchte etwas（mit seinen Händen）sehr gern tun. 2. jmd. möchte jmdn. ohrfeigen（a）（－）.
（指の中がかゆい：うずうずしている）

32. etwas mit dem kleinen Finger [der linken Hand] machen （ugs.）: etwas ohne Mühe machen, nebenher erledigen（a）（±）（何かを小指でする：苦労なしについでに片づける）

33. etwas mit spitzen Fingern anfassen（ugs.）: etwas [aus Widerwillen] vorsichtig anfassen（a）（－）
（何かを指先でつまむ：嫌々ながら用心してつかむ）

34. mit [den] Fingern/mit dem Finger auf jmdn., auf etwas zeigen: jmdn., etwas in der Öffentlichkeit bloßstellen, anprangern（a）（－）（指で誰かを指す：公衆の面前で誰かをさらし者にする）

35. man zeigt nicht mit nackten Fingern auf angezogene Leute! （ugs.）: scherzhafte Zurechtweisung, dass es unhöflich ist oder als Bloßstellung missverstanden werden kann, wenn jmd. auf eine Person aufmerksam macht, indem er mit dem Finger auf sie deutet.（a）（－）
（衣服をまとった人々を裸指で指すことはしない：誰かを指さしたりすると、非難、こと上げしていると誤解される可能性があるということを、冗談めかしていう表現）

36. nur mit dem kleinen Finger zu winken brauchen: eine solche Macht über andere haben, dass man seine Wünsche nur anzudeuten braucht（小指で合図をするだけでいい：強力な支配力をもっているので、自分の望みを示唆するだけで、思い通りに人を動かすことができる）

37. jmdn. um den [kleinen] Finger wickeln können （ugs.）: jmdn. leicht lenken, beeinflussen können

(a) (±) (誰かを小指に巻き付けることができる：誰かを容易に左右できる)

38. jmdm. unter/zwischen die Finger kommen/geraten (ugs.) : 1. in jmds. Gewalt geraten. 2. zufällig von jmdm. [vor]gefunden werden (d) (−) (誰かの指の間に入る：誰かの支配下に入る)

39. jmdm. unter/zwischen den Fingern zerrinnen: von jmdm. nicht zusammengehalten, bewahrt werden können (a) (−) (指の間から流れていく：しっかり保持できない)

40. jmdm. rinnt das Geld durch die Finger: jmd. ist verschwenderisch (S. 246) (a) (−) (指から金が流れていく：無駄遣いしている)

41. da hat der Staatsanwalt [wohl][noch] den Finger drauf (ugs.) : das Mädchen ist minderjährig [und darf noch keinen geschlechtlichen Verkehr haben] (S. 679) (d) (±) (検察が指をおいている：まだ成人していない)

42. gibt man dem Teufel den kleinen Finger, so nimmt er die ganze Hand: wenn man mit etwas Schlechtem beginnt, kommt man nicht mehr davon los. (S. 720) (c) (−) (悪魔に小指を与えると、手ごと持っていってしまう：悪いことを始めると、それから逃れることができない、毒くわば皿まで)

43. jmdm. nicht das Schwarze unter dem Fingernagel gönnen (ugs.) : gegenüber jmdm. sehr mißgünstig sein (a) (−) (誰かに爪の下の黒い部分さえも恵まない：誰かに対して非常に不親切である)

44. bis in die Fingerspitzen: sehr, ganz und gar (a) (±) (指先まで：非常に、まったく)

45. "jmdm. den Daumen aufs Auge drücken/halten/setzen (ugs.) : jmdm. hart zusetzen, jmdn. zu etwas zwingen (a) (−) (誰かの目の上に親指を置く：無理強いする)

46. [jmdm./für jmdn.] den Daumen/die Daumen halten/drücken (ugs.) : in Gedanken bei jmdm. sein und ihm in einer schwierigen Sache Erfolg wünschen (a) (+) (誰かのために親指を押しつける：誰かの成功を願う)

47. den Daumen auf etwas halten/haben (ugs.) : etwas nicht gerne hergeben (a) (−) (あるものの上に親指を置いている：あるものを人にやろうとしない)

48. den Daumen auf etwas drücken (ugs.) : auf etwas bestehen (a) (−) (あるものの上に親指を押しつける：あるものに固執する)

49. Daumen/Däumchen drehen (ugs.) : nichts tun, sich langweilen (a) (−) (親指を回す：なにもしないでいる)

50. per Daumen (ugs.) : als Anhalter (a) (±) (親指で：ヒッチハイクで)

51. [etwas] über den Daumen peilen (ugs.) : [etwas] nur ungefähr schätzen (a) (±) (何かを親指ではかる：おおよそ見積もる)

52. einen grünen Daumen/eine grüne Hand haben (ugs.) :guten Erfolg bei der Pflege von Pflanzen haben (S. 301) (d) (±) (緑の親指／手をもっている：植物の手入れが上手である)

53. Pi mal Daumen (ugs.) : so ungefähr, nach grober Schätzung (S. 548) (d) (±) (親指かけるパイ倍：大まかな見積もり)

54. Rheumatismus zwischen Daumen und Zeigefinger haben (ugs.) : geizig sein (S. 584) (a) (−) (親指と人差し指の間がリューマチにかかっている：ケチである)

55. Daumenschraube: jmdm. Daumenschrauben anlegen/ (selten) aufsetzen: jmdn. brutal zu etwas zwingen (a) (−) (親指を締め付けること：親指を締め付ける：力づくで何かをさせる)

56. jmdm. auf die Zehen treten (ugs.) : 1. jmdn. kränken, jmdm. Ärger bereiten; 2. jmdn. unter Druck setzten, antreiben (a) (−) (誰かの足の指を踏む：1．誰かの気分を損ねる、2．誰かに圧力をかける)

57. etwas im kleinen Zehe spüren (ugs.) : etwas vorausahnen (a) (±) (何かを足の小指に感じる：何かを予感する)

58. vom Wirbel bis zur Zehe (veraltete) : am ganzen Körper (a) (±) 脊髄から足指まで：全身で)